



恵那市教育研究所 恵那市長島町正家一丁目1番地1 恵那市役所 西庁舎4階
https://www.city.ena.lg.jp TEL (0573)26-6850 FAX(0573)26-2155

作品：「おにぎり ぬすまれた おじいさん」
長島小学校 2年生 橋田 蒼司さん
※1年生のときの作品

子供の主体的な学びと成長を支える



東濃教育事務所長
竹腰 宣行

恵那市出身の教育思想家・佐藤一斎は、

『学は立志より要なる莫し。而して立志も亦之を強うるに非らず。只だ本心の好む所に従うのみ。』(学問をするには、目標を立てて、心を振り立てることより肝要なことではない。しかし、心を振り立たせることも外から強制すべきものではない。ただ、己の本心の好みに従うばかりである。)

と遺しています。学ぶという営みは、単なる知識の習得ではなく、「どのように生きるか」という志を立てることから始まるという教えです。

新学習指導要領の論点整理において、民主的な社会の創り手の育成のため「児童生徒の『好き』を育み、『得意』を伸ばす」という観点が重視されています。このことは、子供が自らの興味・関心に根ざした学びを通して自己理解を深め、将来に向けた可能性を広げていくことを意図しています。

しかしながら、「好き」や「得意」を単なる技能や知識の拡充にとどめてしまえば、学びは表層的なものに終わりがねません。重要なのは、それらを手掛かりとして、自分は何を大切に、どのように社会と関わりながら生きていくのかという志へと高めていくことです。画一的な一斉指導から脱却し、一人ひとりの興味・関心に基づいた学びや、個に応じた学びの重要性が示されています。

「学は立志より要なる莫し」という言葉に立ち返るとき、教育の原点を再認識することができます。予測困難で変化の激しい時代の中で子供たちがしなやかに生き抜いていくために

は、確かな学力とともに、自ら志を立て、その実現に向けて粘り強く挑戦する力が不可欠です。私たちは子供一人ひとりの内に芽生える「こう生きたい」という思いを大切に育て、それが社会に貢献する志へと成長していくよう支えていくことが大切です。

東濃教育事務所では、「人間尊重の気風がみなぎる東濃の教育を推進する～東濃の宝である全ての子供の主体的な学びと成長を支える教育の推進～」を方針に掲げ、子供たちを取り巻く様々な課題に対し、市教育委員会と連携を図りながら、学校への支援を行います。

■【重点1】

魅力ある教職員、職員集団の育成
～教職員が元気で笑顔～

働き方改革の推進により、時間外勤務時間が年々減少しており、働きやすい環境づくりを目指した市教育委員会及び各学校における業務改善等が進められているところです。一方、キャリアステージに応じた人材育成や働きがいを実感できる職場等の課題に対し、同僚性を高めることや危機管理体制の充実などを図ることが重要であると考えております。

■【重点2】

「主体的・対話的で深い学び」の実現を図り、
自他のいのちを大切にする教育の推進

昨年度作成した資料「学びを支える『指導と評価』～授業改善のための具体的手立て～」をもとに、指導と評価の一体化を図り「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、資質・能力を育む指導のさらなる充実を図ります。

また、全ての子供が安心して学び、関わり合い、自己実現を図ることができるよう、「SOSの出し方」教育の充実とともに、子供に関わる全ての大人が子どものSOSをキャッチし日常のケアにつなぐ「SOSの受け止め方」に係る研修の充実を図ります。

演技ワークショップで育むコミュニケーション能力・自己理解力・柔軟な対応力 ～恵那南中学校での実践から～

恵那市では、演技の手法を通して、子供たちのコミュニケーション能力や自己理解力、柔軟な対応力を育む「演技ワークショップ」を行ってきました。その一環として、今年度からは、学校に講師の先生を招く演技ワークショップの授業を開始しました。

その先駆けとして、5月27日と28日の2日間、恵那南中学校にて演技ワークショップの授業が実施されました。その授業の中で、講師の秦先生が示された指導内容や指導方法には、日頃、どの学校でも大切にするとよいヒントがたくさんありましたので紹介します。

POINT 1 講師 秦 秀明氏 による「心と体を通わせる」ワーク

講師には、数多くのメジャー俳優の指導に携わるアクティングコーチの秦秀明氏(株式会社DD Nexus Partners代表)を迎えました。秦先生のワークは単なる演技の練習ではなく、以下のような活動を通して、コミュニケーション能力・自己理解力・柔軟な対応力を磨くものでした。

1 演技ワークショップの主な活動例

- ① リズムしりとり ルールに縛られず「存在しない言葉」もOKとし、とにかく止めずに続けることを目指します。
- ② 連想ゲーム 前の人の言葉から感じたことを次の人に繋げ、「伝える意識」を養います。
- ③ 人文字・場面構成 クラスや学年全員で「空」という文字を作ったり、「教室」や「コンビニ」などの場면을体一つで表現したりします。



②で「目で聴いて、目で伝える」様子



③で「職員室」を表現する様子



秦先生からのアドバイス

秦先生はこれらの活動を通じて、「目で聴いて、目で伝えること」や「1つのゴールに対し、自分以外の誰かのために何をするかを考えること」等の大切さを子供たちに伝えました。

2 生徒の感想

ワークショップ後のアンケートでは、生徒たちに大きな気づきが見られました。

- 「同じ日本語を聞いても、人によって感じ方が全然違うことに驚いた。それが『個性』なんだと分かった。」
- 「普段あまり話さない子とも、活動を通して仲良くなれた。相手に寄り添うことの大切さを実感した。」
- 「言葉だけでなく、表情や間などの大切さに気付いた。これからの学校生活でも意識したい。」

多くの生徒が、自分や他者の個性を肯定的に受け止め、積極的に関わろうとする意欲を見せていました。



POINT 2 日常の授業や学級経営に取り入れたい「学びの視点」

今回のワークショップで秦先生が伝えていたことは、特別な活動としてだけでなく、各学校の日常的な教育活動に以下のような具体例で取り入れることができます。

【取り入れたい「学びの視点」】 「自ら考えて動く」ことを習慣にする。

【具体的な活動】「清掃時間の役割分担」や「集団行動の整列」の場面で

- 目指す姿：指示を待つのではなく、周囲を見て「今、自分に何ができるか」を考えて動く姿。
- 指示の例：「先生が指示するのを待つのではなく、周りを見て『今、何が必要か』を自分で見つけて動いてみよう。」

【取り入れたい「学びの視点」】 「目で聴いて、目で伝える」を習慣にする。

【具体的な活動】「日常の挨拶」や「ペア・グループ等の話し合い」の場面で

- 目指す姿：表情や視線から相手の思いを汲み取り、自分の心も表情に乗せて伝える姿。
- 指示の例：「挨拶は声だけでなく、相手の目を見て表情でも伝えよう。相手の『目』をしっかり見て、言葉以上の思いを聴いてみよう。」

最後に

秦先生が子供たちに伝えていたこと(取り入れたい「学びの視点」)は、AIには代替できないコミュニケーション能力・自己理解力・柔軟な対応力を育むための土台となります。これからの生きる子供たちが自ら考え他者と協力しながら活動する力を育てていきましょう。

第5回 知新セミナー「教員向け演技ワークショップ」開催

第5回知新セミナー「教員向け演技ワークショップ」では、講師に秦秀明氏を迎え、先生方の表現力や対話力を高める実践的なセミナーを開催します。子供たちへの惹きつけ方や価値付け方といった「指導力」をワークショップ形式で体感しながら学ぶことができる貴重な機会です。

【日時】令和8年7月31日(金) 【時間】9:30～16:20

01

ミライシードの活用

はじめに

GIGAスクール構想の推進により、全国の学校において1人1台端末と高速通信環境が整備され、児童生徒の学びの在り方が大きく変化しました。その中で、児童生徒一人一人の理解度や学習状況に応じて学びを進めることができる「AIドリル」の活用が広がっています。このような背景の中で、恵那市では3年前に「ミライシード(ドリルパーク)」を導入しました。また、令和8年度『恵那市の教育(方針と重点)』においても、教科等指導に「ICTを有効に活用し、学習効果を高めると共に家庭学習につながる授業を工夫する」を位置付けています。

導入から3年経った現在、授業を中心にドリルパークの活用が進んでいます。一方で、その他の機能の活用や家庭学習での活用については進んでいない現状です。そこで、その他の機能とそれらを活用した「家庭学習につながる授業の工夫」の一例を紹介します。

02

ミライシードの活用

ミライシードの拡充機能を生かした家庭学習につながる授業の工夫

1 ドリルパークを単位時間に位置付け、家庭学習につなげ基礎学力の定着を図る

「ドリルパーク」は、継続的に取り組むことで、児童生徒の基礎学力の定着に寄与することがベネッセや市内の学校の取組から確認されています。そこで、授業の終末で評価問題としてドリルパークで課題配信します。そして、結果に基づいてAIから提案される問題を家庭学習で取り組むよう指導することで継続的に取り組ませ学びの定着を図るサイクルを生み出せます。さらに、次時の導入等で復習問題を配信することで、基礎学力定着の強化が図れます。



ドリルパークのホーム画面

2 テストパークを単元出口に位置付け、家庭学習の充実につなげ思考力・判断力・表現力の向上を図る

「テストパーク」は、教科書の単元に対応した確認テストを実施できるデジタルテストです。ドリルパークの知識の定着を図る一問一答形式に加えて、思考力を問うような発展的な問題も含まれます。意欲的に取り組むことでドリルパークの利用だけでは伸び悩んでいた中～上位層の学力向上に寄与することがベネッセや市内の学校の取組から確認されています。このような特徴から、単元テストや実力テスト、定期考査前の学習においてドリルパークの問題ではだけでは物足りない児童生徒にテストパークを勧めたり、課題配信したりすることで、思考力・判断力・表現力の向上を図れます。

3 カルテを活用して家庭学習を見直し、学びの自己調整の伸長を図る

「カルテ」は、児童生徒のドリルパークやテストパークの学習履歴やテスト結果などを一元的に管理する機能です。カルテはデータの管理だけでなく、学習に関する「目標設定」と「振り返り」を1週間単位で行います。そして、それらと実際の取組をAIが分析して学習へのアドバイスをします。主体的に活用していくことで、学びの自己調整の伸長が期待できます。このような特徴から、夏休みなどの長期の休みや、実力テストや定期考査、高校入試に向けた一定期間の学習を自分で計画しなければならないときに学習計画表と一緒にもしくは計画表に替えて活用することが考えられます。また、カルテは教師も確認できるので、一人一人の学び方について適切な声掛けすることで主体的な活用を促します。



カルテのホーム画面

03

ミライシードの活用

おわりに

ミライシード内の、各機能を授業や家庭学習で活用したり、授業と家庭学習とをつないだりすることで児童生徒の力を伸ばすことができます。一方で、AIの機能に頼りきるのではなくAIの力も借りて一人一人を見届け、教師が価値付けたり励ましたり指導したりすることが大切です。各校において、実態に応じた工夫を積み重ねながら、ミライシードも効果的に活用し児童生徒一人一人の理解度や学習状況に応じた学びが進んでいくことを期待しています。

ミライシードの詳細について

ミライシードは問題数を増やしたり短時間で取り組める課題を作成したり、日々アップデートを続けています。また、様々な活用事例も専用サイトで紹介しています。サイトへは下記のURLもしくは、右記QRコードから入れます。



専用サイトはこちら

<https://bso.benesse.ne.jp/miraiseed/index.html>



子供たちの学びを支えるために ～学校全体で支える特別支援教育～



今年度、恵那市の小・中学校では、特別支援学級に在籍する児童生徒が150人、通級指導教室を利用する児童は129人と、全体の9%を超える子供たちが特別な支援を受けています。これは、こども園からの引継を活かし、一人一人のニーズに応じた支援に早期から切れ目なく取り組んでいるためと言えます。一方で、特別支援学級の担任を見ると、経験5年目までの先生が70%を超える状況にあります。また、通常の学級においても、特別な支援や配慮を必要としている児童生徒が在籍しています。個人の経験や担当者一人の取組では、行き詰ってしまうケースも少なくないようです。そのため、担任一人で抱え込まず、「学校全体で支える特別支援教育」が今、求められています。

「チームで支える」一歩を

学校では、担任、教科担任、特別支援教育コーディネーター、管理職など、それぞれの立場から子供たちを支えています。小さな変化を見逃さず、校内委員会で情報共有しながらチームで考えることで、支援の方向性が見えてくることがあります。子供たちの気になる姿があったとき、「困っている子が出ているサイン」と捉えたいです。

事例紹介

【事例】授業中に離席するAさん

授業中、席を離れて歩き回るAさん。先生は「席に戻りなさい」と何度も声を掛けますが、なかなか改善しませんでした。そこで、校内委員会で情報共有をしながら、なぜそのような姿が見られるのか考えました。

見立て

- 長く座り続けることが難しい。
- 次に何をすればよいか分からず不安になる。
- 学習内容への見通しがもてない。



その見立てを受けて、Aさんへの具体的な支援を決めました。

支援方法

- 活動の流れを「見える形」で提示する。
- 途中で体を動かせる役割（プリント配付など）を用意する。
- 短い時間で区切って達成感をえられるようにする。



校内で役割分担を行い、チームとして取り組みました。

チームの取組

- 担任（中心となる支援者）：子供の実態把握。具体的な支援の実行。保護者との連携。
- 教科担任：全職員で統一した対応の実施。担任へのフィードバック。
- 特別支援教育コーディネーター：校内委員会の計画と運営。支援方針の整理。担任へのサポート。保護者との連携。
- 管理職：チーム支援を機能させる環境体制整備。



結果

定期的に校内委員会を行い、PDCAサイクルで見直しを進めることで、Aさんは少しずつ席に戻って活動に参加できる時間が増えていきました。

子供たちのサインに気付き、学校全体で支援につなげる

子供たちが出しているサインをアンテナ高く捉え、その背景要因となる「困っている理由」に目を向け、チームとして学校全体で考えることで、子供への見方が広がり、具体的な支援につながります。支援が変わると、子供の姿が変わります。

私たちは、先生方の実践に寄り添いながら、子供たちが自分のよさを最大限に発揮して生活できるよう、一緒に考えていきます。ご相談は、電話またはメールにて随時受け付けております。小さなことでも構いませんので、お気軽にご連絡ください。



やってみよう!つながろう!
～絵本から広がるあそびを通して～



東野こども園

東野こども園は、恵那市街地の南側に位置し、阿木川ダムや根の上高原に囲まれた豊かな自然の田園地域にあります。園庭にも四季折々の自然が広がり、春には桜や藤の花、初夏にはあじさいが彩りを添え、子供たちは季節の移ろいを肌で感じながら過ごしています。こうした環境の中で、子供たちは植物や小動物に親しみ、驚きや発見を楽しみながら日々の遊びを広げています。小規模園ならではの温かい雰囲気の中で、学年の枠を越えて一緒に遊ぶ姿が多く見られ、異年齢で関わる経験を通して、思いやりや憧れの気持ちが自然と育まれています。



また、長年にわたり絵本を核とした保育を大切にしてきました。絵本は子供たちの心を揺さぶり、想像力や感性を豊かに育てる大切な教材です。今年度もその魅力を活かし、さまざまな遊びや生活の中で「やってみよう」という意欲を引き出しながら、人との関わりを楽しむ活動を広げています。また、子供一人ひとりの「好き」や「夢中」を大切に受け止め、主体的な遊びへとつなげる保育を心がけています。

1 絵本からつながる

毎日の読み聞かせを通して、お気に入りの絵本に出会い、その世界が遊びや生活へと広がっています。気に入ったフレーズを繰り返して声に出すことで友達との掛け合い遊びへと発展したり、登場人物になりきってごっこ遊びを楽しんだりする姿が見られます。絵本をきっかけに会話が生まれ、子供同士のつながりや表現の広がりが育まれています。

2 地域とつながる

地域の読み聞かせサークル「ちちんぶい」の皆さんには毎月来園していただき、素話やエプロンシアターなど多様な表現に触れる機会をいただいています。また、東野歌舞伎保存会の方々のご指導のもと、年長児が歌舞伎を披露する機会もあり、東野の伝統文化に親しむ貴重な体験となっています。さらに、地域の方から野菜の苗をいただき栽培活動を行うことで、食

への関心を高め、食育にもつなげています。収穫した野菜に触れ、「食べてみよう」とする気持ちが芽生えるなど、生活に結び付いた学びが広がっています。



3 保護者とつながる

園の伝統行事である「家族の出番」では、保護者が一日保育者として活動に参加します。子供たちと共に過ごす時間は、保育への理解を深めるとともに、園と家庭との信頼関係を築く大切な機会となっています。保護者による読み聞かせも好評で、季節や行事に合わせた絵本の時間は子供たちの楽しみの一つです。毎日の絵本貸し出しも、家庭と園を結ぶ大切な取組として継続しています。



4 仲間とつながる

活動の前後には「ぞうくま会議」を行い、感じたことや考えたことを伝え合う時間を設けています。友だちのよいところに気付き、言葉にして伝えることで、仲間意識や自己肯定感が高まっています。また、隣接する小学校との交流も盛んで、小学生との関わりを通して優しさにふれ、憧れや思いやりの心が育っています。

このように東野こども園では、人や地域、自然とのつながりを大切にしながら、多様な体験を通して表現する力を育てています。子供たちが自分らしさを大切にし、生き生きと生活できるよう支援するとともに、ふるさと東野を大好きになる心を育てていきます。

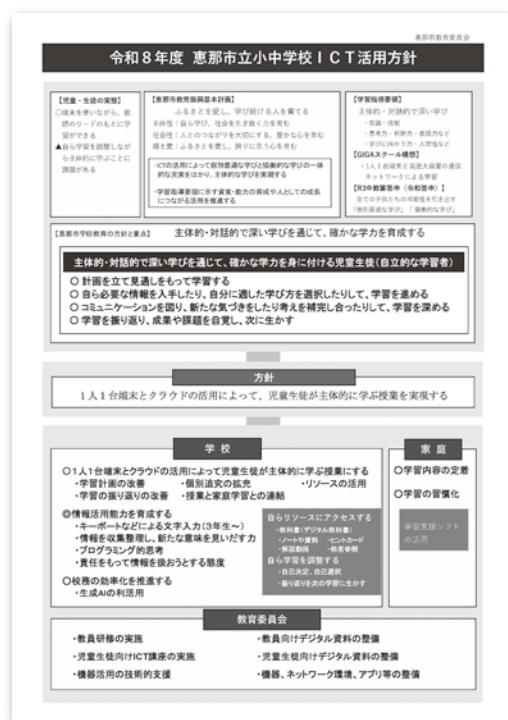
「使う」から「使いこなす」へ ～令和8年度 恵那市立小中学校ICT活用方針について～

令和7年度の全国学力・学習状況調査(児童・生徒質問紙)を分析したところ、本市の授業における端末利用頻度は、小学校で73.9%(全国46.7%)、中学校で93.1%(全国53.2%)に達しており、県内および全国平均を大きく上回る高い結果となりました。しかし、その一方で課題も見えてきました。それは「ICT機器で文章を作成できる」「情報を整理できる」「ICT機器を活用し自分のペースで理解しながら学習を進める」といった肯定的な回答が県や全国平均を下回っており、活用の「頻度」に対して、子供たち自身が「身に付いた力」を十分に実感できていないことです。

こうした背景を踏まえ、恵那市教育委員会では、「令和8年度 恵那市立小中学校ICT活用方針」を作成しました。本方針では、恵那市学校教育の重点である「主体的・対話的で深い学びを通じて、確かな学力を育成する」ことを基盤とし、「1人1台端末とクラウドの活用によって、児童生徒が主体的に学ぶ授業を実現する」ことを掲げています。

本年度の最重点事項は、「子供自身の情報活用能力の育成」です。単に端末を操作するだけでなく、小学校3年生以上でのキーボード入力スキルの習得や、情報を収集・整理し新たな意味を見いだす力の育成、さらには責任をもって情報を扱う態度の推進(情報管理担当研修会を通じた年間計画の策定等)に注力していきます。

1人1台端末とクラウドの活用によって、児童生徒が主体的に学ぶ授業の実現を目指していきましょう。



令和8年度 恵那市立小中学校ICT活用方針

温故知新



恵那市立中野方小学校
校長 林 裕二

大学を卒業し、赴任した中学校で一年生の担任を仰せつかりました。現在では珍しくありませんが、当時は同期の中でも担任を務めている者はわずかでした。手探りのまま日々の業務や様々な取組をこなすことで精一杯の毎日でした。その頃の私は、未熟なこともあり、日常の生徒指導・授業・行事をそれぞれ別のものとして捉え、「点」としての対応に終始していました。多くの先輩から学級経営の心得を教えてくださいましたが、その意味を十分に理解できませんでした。例えば「合唱は学級を映す鏡である」という言葉です。経験を重ねる中で、日々の積み重ねが行事に表れること、「点」が「線」としてつながることに気づき、実感できるようになりました。

また、中堅の頃にお世話になった学年主任は「特別をつくらない」ことを大切にしてみました。その当時は、合理的配慮が位置付いてはいませんでした。様々な特性を持った生徒一人一人のことを理解した上で「特別をつくらない」でした。迎合に陥らず主導権を手放さない。その一方で、必要であれば、互いの考えを交流しながら脈々と受け継がれてきた学校の伝統や文化をよりよく見直す柔軟さもありました。その姿から、学級経営のやりがいと奥深さを実感しました。

現在、私は校長として先生方へ助言する立場にあります。その中で常に意識しているのが、「説教、自慢話、昔話に終始しないように伝える」です。先輩から学んだ教えや自分の経験談をそのまま伝えるのではなく、相手に寄り添い、これからの実践につながる言葉として届けていくことを意識しています。

これまでにいただいた教えを自らの中で意味付けながら、次の世代へとつないでいくことこそが、自分に求められている役割であると考えています。